はじめに

本報告書は、東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で行う「子どもの生活と学び」研究プロジェクトの一環として 2020 年に実施した「中高生のコロナ禍の生活と学びに関する実態調査」（略称：中高生コロナ調査）の成果をまとめたものです。

両機関による共同研究プロジェクトは、小学 1 年生から高校 3 年生までの約 2 万組の親子モニターを母体にしたパネル調査を 2015 年から行っています。両機関はこのプロジェクトの一環として 2020 年 8 ～ 9 月にかけて、モニターのうち中学 1 年生から高校 3 年生の子どもを対象に、休校期間中（2020 年 3 ～ 6 月）の生活と学習の様子をたずねる調査を実施しました。そして、2019 年と 2020 年の「子どもの生活と学びに関する親子調査（親子調査ベースサーベイ）」（いずれも 7 ～ 9 月実施）、ならびに 2021 年 3 月に高校 3 年生の子どもを対象にした「卒業時サーベイ」の結果と組み合わせることで、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）による休校前、休校中、休校後、卒業時（高 3 のみ）の 4 時点の変化を追跡しました。本報告書は、パネル調査の特徴である継続性を生かして、休校前後の中高生の意識や行動を明らかにしています。そのことは、学校や学校外の教育機会が子どもたちにどのような意味や価値を持っているのかを考える、一つのきっかけを与えてくれています。

また、ベースサーベイは、親子のダイアド・データという特徴もあり、保護者調査では家庭の社会経済的な状況を把握しています。コロナ禍とそれに伴う休校は、家庭にも大きな負担がかかるものでした。保護者によるケアの程度や子どもへのインパクトは、家庭によって異なっていたと想像できます。家庭の社会経済的地位（Socio-economic Status）による違いを明らかにすることは、より大きなマイナスの影響を受けた子どもへの支援を考えるうえで必要です。本報告書で展開されている一つひとつの分析が、困難にある家庭と子どもへの対応を考える一助になることを願います。

本報告書の作成にあたっては、佐藤香先生（東京大学）、耳塚寛明先生（青山学院大学）、松下佳代先生（京都大学）、小野田亮介先生（山梨大学）、大﨑裕子先生（東京大学）、山口泰史先生（帝京大学）にご執筆をいただきました。また、プロジェクトの運営にあたっては、上記の先生方のほかに石田浩先生（東京大学）、秋田喜代美先生（学習院大学）、藤原翔先生（東京大学）、須藤康介先生（明星大学）にお力添えをいただきました。各先生には、日ごろのご指導に厚く御礼申し上げます。

さらに、こうした調査研究を実施できるのも、何年にもわたって調査にご協力をいただいているたくさんの小学生・中学生・高校生と保護者の方がいるからにほかなりません。ご協力くださっている皆様にも、深く感謝を申し述べたいと思います。

今回の調査結果には、コロナ禍の困難を乗り越え、これからの子どもたちの学びと育ちの環境のあり方を考えるうえで参考になるデータが豊富に詰まっています。こうしたデータが、保護者、教員、教育関係者の皆様の教育実践や子育て、研究にお役に立つことができましたら幸いです。

2022 年（令和 4 年）3 月

ベネッセ教育総合研究所